

学位論文要旨

学校改革としてのイエナ・プランに関する研究  
— ペーターゼンの自律的教育科学の構想に着目して —

広島大学大学院人間社会科学研究科  
教育科学専攻 教育学プログラム  
教育学コース

D202070 安藤 和久

## I. 論文構成

序章 本研究の目的と構成

第一節 研究の目的および対象と方法

第二節 先行研究の検討と研究課題の設定

第一章 ペーターゼンの自律的教育科学の構想

第一節 ペーターゼンの教育科学論における学校改革構想

第二節 教育学的事実研究による教育学の科学的自律と学校改革

第三節 教育学的事実研究を手がかりとした学術的な教師教育の設計

第二章 ペーターゼンによるイエナ・プランの授業指導論

第一節 授業指導論の理論的背景

第二節 授業指導論の構造と特質

第三節 イエナ大学附属学校における授業指導論の実践的展開

第三章 1924-1950年のイエナ・プランによる学校改革過程

第一節 イエナ大学附属学校とイエナ大学教育科学研究所の歴史的展開

第二節 イエナ大学附属学校外でのイエナ・プランによる学校改革

第三節 イエナ・プランによる学校改革過程の時期区分とその特徴

第四章 イエナ・プランからの学校改革の問い直し

第一節 イエナ・プランの今日的展開

—イエナ大学附属学校閉鎖後のイエナ・プランの相対化に向けて—

第二節 エポックとしての改革教育学におけるイエナ・プランの再評価

第三節 公教育としての学校改革の展望

終章 本研究の成果と課題

第一節 各章で得られた知見

第二節 本研究の成果

第三節 本研究の展望と課題

## II. 本研究の目的と構成（序章）

### 1. 研究の目的および対象と方法

本研究の目的は、イエナ・プラン(Jena-plan)がいかなる学校改革であったのかを、ペーターゼン(Peter Petersen, 1884-1952)の自律的教育科学の構想という視点から明らかにすることである。

学校改革(Schulreform)は「学校を変化・改善するためのありとあらゆる努力」(Schulze 2011, S. 762)と理解されるが、とりわけ「外的学校改革でもって通常は、学校の構造または教育制度全体の改革が意味される。それは政治的に主導される。内的改革とはたいていは、教授学・方法論的な教授・学習アレンジ、学校内部の組織構造や進行あるいは教育学的プロフィールの変更が意味される」(Link 2017, S. 90)と、外的学校改革と内的学校改革が区別されて論じられてきた。

ペーターゼンによれば改革(Reform)は歴史に結びつきながら連続的に進展していく有機的な再構築(organisches Neubilden)である。それゆえ、「絶対的に新しいものによってかつてのものを取り替える傾向をもった歴史的展開の暴力的中断」たる革命(Revolution)あるいは、「自身から新たなものを創造することに失敗する時代におけるかつての理想の更新」たる復興(Renaissance)は学校改革とはみなされない(vgl., Petersen 1913, S. 1-3)。加えて、学校改革の理念は国家ではなく民衆によって、政治的なものではなく教育学の発展と関連した教育学的問いによって導かれなければならない(vgl., ebd., S. 4-5)とするため、政治的に主導されるという意味での外的学校改革を志向するものではない(vgl., Petersen 1925a, S. III)。しかしながら、ペーターゼンがイエナ・プランを通して学校制度の再編を提起している(vgl., Petersen, & Förtsch 1930, S. 112-116)ように、「学校内部の組織構造や進行あるいは教育学的プロフィールの変更」たる内的学校改革のみを意図しているわけでもない。それゆえ、本研究ではペーターゼンの学校改革の構想、あるいはその現実化としてのイエナ・プランを内的学校改革の試みであると同時に、それを超えて学校制度の改革へと接続することを志向する「下から」の外的学校改革の試みであったと理解する。

イエナ・プランとは、ペーターゼンが1924年からイエナ大学附属学校において取り組んだ学校改革の成果が1927年の国際新教育連盟(International New Education Fellowship)第4回国際大会において発表される際に、会議の責任者ソーパー(Clare Soper)とマッシュューズ(Dorothy Matthews)によって名づけられた呼称である(vgl., Petersen 1927d, S. 3)。それゆえ、イエナ・プランは異年齢で組織した基幹グループ(Stammgruppe)や、子どもの生活リズムに応じて構成した週作業案(Wochenarbeitsplan)などの教授組織を有する学校モデルとして理解されてきた。他方で、イエナ・プランは創始者ペーターゼンによる「自由で一般的な民衆学校(freie allgemeine Volksschule)」に向けた学校改革の構想が現実化したものでもある。本研究で対象とするイエナ・プランとは、1924-1950年の間にイエナ大学附属学校で進められた学校改革、それと同時代のドイツにおいて取り組まれたイエナ大学附属学校外でのイエナ・プランによる学校改革の試みを指している。しかしながら第四章では、1950年以降ドイツで復活し、今日オランダを中心に展開している「イエナ・プラン」による学校改革運動も対象として取り扱う。

上述の対象を本研究ではペーターゼンの自律的教育科学の構想という視点から検討する。ペーターゼンの自律的教育科学とは、教育科学に関する理論的研究に加え、教育学的事実研

究(pädagogische Tatsachenforschung)と学術的な教師教育(akademische Lehrerbildung)を含んだ構想である。この構想は、哲学や心理学から教育学を学問領域として自立させるのみでなく、教育学を独自の見地と反省性をもって科学として自律的に発展させることを企図したものと理解できる。加えて、この構想は「自由で一般的な民衆学校」という学校改革の理念とも結びついている。というのもそれが同理念を、教育学が主導することで、他学問からのみでなく国家や教会によるイデオロギー支配からも自由になる学校として、学術的な教師教育による将来の教育実践の改善を媒介に、全ての子どもをアビトゥアへ導く一般学校として現実化することを志向しているからである(vgl., Petersen 1930, S. 1)。

以上より本研究では以下のような方法をとる。第一章では、ペーターゼンの教育科学における「自由で一般的な民衆学校」の理念を確認したうえで、教育学的事実研究と学術的な教師教育への取組に着目して、ペーターゼンの自律的教育科学の構想の特質を検討する。第二章では、ペーターゼンによるイエナ・プランの授業指導論の構造と特質に着目することで、イエナ・プランの理論的枠組みを明らかにするとともに、それがイエナ大学附属学校でいかに実践的に展開していたのかを、教育学的事実研究による実践の記録を手がかりに検討する。第三章では、イエナ大学附属学校とイエナ大学教育科学研究所の歴史的展開、イエナ大学附属学校外でのイエナ・プランによる学校改革に着目する。このことを通して、1924-1950年のイエナ・プランによる学校改革過程を諸学校の改革を企図した過程として特徴づける。そのため、第三章ではペーター・ペーターゼン・アーカイブ・フェヒタ(Peter Petersen Archiv Vechta: PPAV)で収集した史資料も用いて検討を行う。第四章では、イエナ・プランの今日的な展開をふまえたうえで、改革教育学の現代的機能へのアプローチを提示したケレンツ(Ralf Koerrenz)の研究を参照しながら、エポックとしての改革教育学におけるイエナ・プランをいかなる学校改革の試みとして捉えられるのかを検討する。これらを通して、イエナ・プランから描きうる学校改革の展望と課題を明らかにする。

## 2. 先行研究の検討と研究課題の設定

本研究ではペーターゼンとイエナ・プランに関する研究を先行研究とする。そのうえでイエナ・プランが20世紀初頭の改革教育学(Reformpädagogik)運動に位置づく学校改革であることから、改革教育学に関する日本とドイツの研究も先行研究として検討した。

日本の教育学研究においてペーターゼンとイエナ・プランは、三枝・山崎による邦訳書(ペーターゼン 1984)、大日方による邦訳書(ペーターゼン 1943)をはじめ、宮田(1995)、三枝(1957, 1982)、松尾(1995)、境沢(1996)、屋名池(2002)らによって紹介されてきた。その他日本の先行研究はその研究関心に応じて以下のように整理することができる。

- ①イエナ大学附属学校での学校改革における教授組織に着目した研究(熊井 2015, 2017、小林 2006、三枝 1964、鹽見 1933、深沢 1979)
- ②ペーターゼンの教育思想に着目した研究(伊藤 2010、伊藤 1992, 1993a, 1993b、三枝 1958、佐久間 2010b, 2015a, 2016、対馬 1987、山極 1932)
- ③ペーターゼンの授業指導論を対象とした研究(助川 2008、手取 1991、深沢 1982a, 1982b)
- ④ペーターゼンとイエナ・プランの研究動向を対象とした研究(伊藤 2009、佐久間 2010a, 2013)

⑤今日的なイエナ・プランの展開に関する研究(ドイツでの展開は、佐久間 2014, 2015b、田中 2019, 2022、松尾 2016。オランダでの展開は、奥村 2016, 2022、フェルトハウズ/ ウィンタース 2020、リヒテルズ 2006, 2019。日本での展開は、安彦 2019、熊井 2021、中川 2019、南部 2021、本田 2020、リヒテルズ・苫野 2016)

日本の先行研究において、イエナ・プランは学校モデルとしてその教授組織に着目されてきた一方で、イエナ大学附属学校での実践や改革の過程、同時代の他の学校でのイエナ・プランによる学校改革の試みは研究の対象とされてこなかった。ペーターゼンの教育思想に関する研究においては、邦訳が存在する『小イエナ・プラン(Der Kleine Jena-Plan)』(1927年)が主な参照先とされ、ペーターゼンの教育科学の主著『一般教育科学(Allgemeine Erziehungswissenschaft)』(1924年)は限定的にしか参照されてこなかった。そのため、ペーターゼンの教育思想においては明らかにされていない部分も多い。さらに、教育学的事実研究や学術的な教師教育の取組についても研究の対象とされてこなかった。

ドイツの教育学研究では、Kosse(1963)、Kluge(1992)、Retter(2007)らによってペーターゼンとイエナ・プランの伝記的研究が進められてきた。そのうえで、先行研究の研究動向はその研究関心に応じて大別すれば以下の3つの動向に整理することができる。

第一に、ペーターゼンと国家社会主義(Nationalsozialismus)をめぐる研究動向である。すなわち、ペーターゼンは国家社会主義に積極的に協力した教育学者であったのか、ペーターゼンと彼の構想したイエナ・プランは今日の教育にとって模範といえるものなのか、といった論点をめぐる議論が展開されてきている(例えば、Maschmann, & Oelkers 1985, Kaßner 1989, Keim 1989, Benner, & Kemper 1991 など)。これらは1984年ごろから今日までペーターゼン研究の中心的論点として議論され、その議論自体が研究の対象とされることもある(Schwan 2000, 2007, Ortmeyer 2009, Retter 2020)。

第二に、イエナ・プランに関する研究動向である。イエナ大学附属学校でのイエナ・プランに関しては、その教授組織上の特徴をまとめた Dietrich<sup>(4)</sup>(1986)をはじめ、ヘルバルト学派の伝統と関連づけて理論的に検討した研究として Koerrenz(2004)や Coriand(2015)、実践的側面に着目した Koerrenz, & Lütgert(2001)、改革教育学の議論を参照しながらイエナ・プランの教授学的特徴を論じた Koerrenz(2012)の研究などがある。今日的なイエナ・プランの動向に関する研究としては、Both(2015)、Bitterlich, & Bitterlich(2018)、Draeger(2018)などが挙げられる。

第三に、ペーターゼンの教育科学研究の科学的性格に関する研究動向である。教育学研究の中でペーターゼンは実証的教育学者とみなされ(Benner<sup>(4)</sup>2001)、実証的な研究方法としての教育学的事実研究に批判がなされてきた(Slotta 1962, クラフキー 1984)。他方で、ペーターゼンの教育科学の現実科学としての科学的性格は Retter(1995)や Coriand, & Koerrenz(2009)にて論及されているものの、これらにおいても彼の理論的営為を学校改革の試みと結びつけて読み解く関心は弱い。

これらの先行研究に加え、改革教育学をめぐる日本とドイツの先行研究を検討した。改革教育学をめぐるのは、多様な教育改革が産み出されたドイツにおける1890年代から1930年代前半の画期的時代を意味するエポック概念(Epochenbegriff)としての改革教育学の批判的検討を通して、教育と改革の関係を問う議論が展開されてきた(例えば、Luhmann, & Schorr 1988, Oelkers<sup>(5)</sup>2005, テノルト 1998, Benner, & Kemper<sup>(2)</sup>2003, Oelkers 2016,

Schraut 2016, Ullrich, & Idel 2017 など)。「新教育」相対化論を通して、エポックとしての改革教育学における諸プログラムが何ら独創的なものではないとされた一方で、プログラムやその創始者の名が用いられるように、それらは今日でも実践的な注目を集めるといった「改革教育の教育学的有用性と歴史的な分析との相違」(テノルト 1998, 106 頁)が指摘されている。しかしながら、現在化された改革教育学的実践としての改革教育学は、学校改革に示唆を提示しえないとされてきた。というのも、それは「個々の学校の観点から見ると、他の学校が試行錯誤したものを自分たちの枠組みに適応させるという構想の折衷的継承」であり、「基本的な構想がただ継承されるだけ」であるがゆえに内的学校改革とはならず、「より大きな学校システムがいかに発展していくことができるかを捉えることは把握されない」がゆえに外的学校改革にとっても有益であるとはみなされないからである(vgl., Oelkers 2016, S. 157-158)。それゆえ、イエナ・プランは「改革論議の公式やマニュアルを流用したもの」(vgl., Oelkers 2005, S. 192)と「歴史的な分析」にて相対化された一方で、学校モデルとしてのイエナ・プランは学校改革に示唆を提示しえないと理解されているのである。

本研究は上述の日本とドイツにおける先行研究の成果の上に成り立っている。それゆえ、重なる部分や参考にした点も多い。また、ドイツの先行研究に関しては、それ自体を本研究の対象としているものもある。

しかしながらこれらに対して、イエナ・プランとはいかなる学校改革なのかを明らかにするために、以下の研究課題を指摘することができる。第一に、イエナ・プランはペーターゼンの自律的教育科学との関連で理解されなければならない。ペーターゼンはイエナ・プランによる学校改革の理念たる「自由で一般的な民衆学校」を、教育学的な事実研究による教育学の自律と学術的な教師教育による将来の教育実践の改善によって現実化できると構想していた。それゆえ、ペーターゼンの学校改革の構想はイエナ・プランのみで捉えられるものではないのである。第二に、イエナ・プランがいかなる教授学上の独自性を有するのかが検討されなければならない。そのためには、「基幹グループ」や「学校居間」といったイエナ・プランの教授組織上の特徴のみでなく、その理論的枠組みとなっているペーターゼンの授業指導論に着目する必要がある。ペーターゼンの授業指導論がどのような構造と特質を有しているのかが、その理論的背景から読み開かれなければならない。第三に、イエナ・プランが内的学校改革の試みであると同時に、それを超えて学校制度の改革へと接続することを志向する「下から」の外的学校改革の試みであったことを考慮したうえで、ペーターゼンとイエナ大学附属学校での学校改革の歴史的展開の中でイエナ・プランによる学校改革過程が明らかにされなければならない。そのことと関連して第四に、改革教育学から学校改革を問うことを通して、これまでの改革教育学理解が問い直されなければならない。エポックとしての改革教育学における教育実践を「学校モデル」とは異なるあり方でいかに理解しうるのかを明らかにすることで、今日の学校改革にとっての改革教育学の意義が再検討される。これらの研究課題に取り組むことで、学校モデルとしてのイエナ・プランとは異なるイエナ・プラン像を提起し、イエナ・プランの学校改革にとっての意義が明らかになる。

### III. 各章の概要

#### 【第一章 ペーターゼンの自律的教育科学の構想】

第一章では、ペーターゼンの自律的教育科学の構想の特質を検討した。

『一般教育科学』においてペーターゼンは、教育科学の基礎概念を整理することを通して、「その中で最良の陶冶を獲得しうる教育共同体はいかに形成されなければならないのか？」(Petersen 1962, S. 107)という学校改革の課題を導出している。そのうえでペーターゼンは、人間の教育に影響を与える領域として経済(Wirtschaft)、国家(Staat)、教会(Kirche)、民衆(Volk)をあげ、民衆こそが学校を主導すべきだと主張する。上述の学校改革の課題に対して、経済・国家・教会による精神的領域への介入から自由であり、職業・国籍・宗派を超えた民衆への教育を志向する一般性を有するという意味での「自由で一般的な民衆学校」という理念に向けて改革していくという応答が描かれているように、ペーターゼンの教育科学論には学校改革の思想が見られる。

そのような教育科学の科学的性格をペーターゼンは、当時主流となっていた教育学を精神科学・文化科学として性格づける潮流ではなく、ヴント(Wilhelm Wundt)とフライヤー(Hans Freyer)を手がかりに自然科学と精神科学の間に現実科学を設ける科学区分を参照し、現実科学として捉えた。ペーターゼンの自律的教育科学は、「意図的で計画的な陶冶についての学問」(Petersen 1932, S. 42)たる教育学を教育科学の一つの学問領域とし、教育科学が教育学に独自の見地を与えることが構想された。教育学の独自の研究対象たる教育学的事実(pädagogische Tatsache)を記録、解釈し、その成果に基づいて教育学を自律的に発展させるために取り組んだのが教育学的事実研究である。教育学の対象を目の前で生起している一回性の事実認め、その教育的意味の解釈を試みた点に、現実科学としての特徴がある。

他方で、1931年以降のイエナ大学附属学校に教授組織の大幅な改革が見られないということには、実証的な手続きに終始した教育学的事実研究の限界も現れている。しかしながら、ペーターゼンの構想では、教育学的事実研究を学術的な教師教育に援用することによって、将来の教師を通して将来の教育実践にアプローチするという回路がとられている。ヴァイマル憲法以降、ペーターゼンは教育学的事実研究を手がかりにイエナ大学での国民学校教師の養成を、理論的養成と実践的養成を共に大学で行う学術的な教師教育として設計した。ペーターゼンが学術的な教師教育を求めるのは、教師が自身の実践に対する教育的自由(pädagogische Freiheit)を獲得することが、将来の教育実践の民主的改善を現実化するために必要であると考えたからである。とりわけ、教育学的事実研究に期待されたのは教育学のままざし(pädagogischer Blick)の訓練であり、実践者に授業事象を認識する目と判断能力の洗練をもたらすことで、自律的教育科学は実践に貢献しうると考えられた。

#### 【第二章 ペーターゼンによるイエナ・プランの授業指導論】

第二章では、ペーターゼンによるイエナ・プランの授業指導論の構造と特質に着目し、それがイエナ大学附属学校でいかに実践的に展開していたのかを検討した。

授業指導論の理論的背景は次の3つの側面から特徴づけることができる。すなわち、リヒトヴァルク学校における生活共同体学校としてのカリキュラム改革、ヘルバルト学派の授業論との批判的対峙、ペスタロッチーの「居間の教育」思想の継承、である。とりわけ、ペーターゼンは伝統的な授業論が教育の人格形成的側面さえも教授の課題とし、教育学が方法

主義かつ主知主義に陥っていると批判した(vgl., Petersen 1937a, S. 59)。それゆえに授業指導論は、知的陶冶のための教授の論としての教授学を人格形成のための指導の論としての教導学(Hodegetik)から捉え直すという理論的要求のもと、「授業の方法論から授業の教育学へ(von der Methodik zur Pädagogik des Unterrichts)」の転換を目指して構想されている。

ペーターゼンが学校改革の中核的課題とした授業指導論は、教育学的状況(pädagogische Situation)を基底に、授業を前もって組織し準備する授業の指導(Führung des Unterrichts)と、授業中の教師のふるまいによる授業における指導(Führung im Unterricht)という2つの指導からなる。「居間の教育」思想は子どもたちがまなざしを向け合って生活し学ぶ学校居間(Schulwohnstube)へと継承され、イエナ・プランを理論的・実践的に発展させていた。

そのうえで授業指導論のイエナ大学附属学校での実践的展開を教育学的事実研究による3つの記録を手がかりに検討した。下級グループでのグループ作業の事例では、授業中の教師による直接的な働きかけはなく、子どもたちのやりとりで学習が進行するものの、事前に教師が一方の子どもに教える者としての役割を与えることで、相互関係を意図的に組織するといった指導性を発揮していたことが明らかとなった。

### 【第三章 1924-1950年のイエナ・プランによる学校改革過程】

第三章では、イエナ大学附属学校とイエナ大学教育科学研究所の歴史的展開、イエナ大学附属学校外でのイエナ・プランによる学校改革に着目し、1924-1950年のイエナ・プランの展開を諸学校の改革を企図した学校改革過程として特徴づけた。

イエナ大学附属学校での学校改革が始められた1924年度の記録を手がかりとすることで、実験初日から異年齢での生活と学習の組織がなされていたこと、他方で基幹グループやグループ作業、週作業案といったイエナ・プランの教授組織上の特徴は未だ見られないことが明らかとなった。さらに、生活空間の秩序が子どもたちとの話し合いによって維持されるなど、教師ヴォルフ(Hans Wolff)によって集団形成に向けての課題が自覚されていた。イエナ大学教育科学研究所では、イエナ大学附属学校での学校改革の試みと並行して教育学週間(pädagogische Woche)が開催されていた。その学校改革にとっての意義に着目して検討することで、①イエナ大学附属学校の実践を公開することで、改革の手がかりとなる参加者の批判的意見を得る場、②参加者がイエナ・プランによる学校改革に従事するきっかけとなる場、③改革の意義を(時の政権の方針との一致を強調するなど)公に宣伝する場、といった3つの役割が明らかとなった。

次にイエナ大学附属学校外でのイエナ・プランによる学校改革に着目した。例えば、フィンスターヴァルデ世俗学校ではイエナ・プランによる学校改革の試みに対する学力低下への不安が教職員にも保護者にも存在していた。それに対して、教職員による熟議や保護者の批判への応答を通して、イエナ・プランによる学校改革を進めたことが明らかとなった。他方で、国家社会主義との関係から見れば、同校の試みがナチス政権下での世俗学校の閉鎖によって終了している一方で、ヴェストファーレン州におけるイエナ・プラン運動では、イエナ・プランを国家社会主義にふさわしい学校と宣伝することで一定の拡大が現実化していた。上述の事例が学校全体の改革であったのに対して、フランクフルトでのゲリッケの実践からは、一人の教師による教育実践にもイエナ・プランの現実化をみることができるといったことが明らかとなった。

以上より、イエナ・プランによる学校改革の過程を諸学校の改革を企図した学校改革過程として、以下の時期区分でもって特徴づけた。すなわち、他の学校に改革が展開するための出発モデルを整えた 1924-1929 年の創設期、教育科学研究所の組織的拡充や教育学的事実研究の深化と共に、イエナ大学附属学校外の学校改革として展開していった 1930-1944 年の拡充／展開期、ソビエト占領下で教育科学研究所の施設閉鎖、ペーターゼンの公職追放とイエナ大学附属学校の閉鎖によって幕を閉じる 1945-1950 年の閉鎖期である。

#### 【第四章 イエナ・プランからの学校改革の問い直し】

第四章では、今日的なイエナ・プランの展開をふまえたうえで、エポックとしての改革教育学におけるイエナ・プランをいかなる学校改革の試みとして捉えられるのかを検討した。

オランダを中心に、ドイツや日本でも展開するイエナ・プランは、オルタナティブな教育への志向性に支えられている。とりわけ、1991年に州立の実験学校としてイエナに設立されたイエナプランシュレーは、「下から」の教育改革を志向する学校連合「垣根を越えて見る(Blick über den Zaun)」に加盟し、公が志向する価値とは異なる独自の価値の策定と実現に取り組んでいる。他方で、「古い」イエナ・プランに対する批判は、ペーターゼンが用いた“Führer”や“Gemeinschaft”の全体主義的性格に向けられており、ペーターゼンの思想を批判的に扱い、イエナ・プランの実践的特徴は継承するという形での批判的継承が見られる。

今日的なイエナ・プランの展開に対する批判としてケレンツは、「学校に何か紛れもない独自なものを授けるような大きな関連が見えなくなっている」(Koerrenz 2012, S. 11)がゆえに、「イエナプランという名称は何のために存在し、何のために今でもなお必要とされているのか？」(ebd., S.13)が不明瞭となっていると指摘する。ケレンツによって導出された改革教育学の現代的機能を論じるためのアプローチより、エポックとしての改革教育学におけるイエナ・プランを、構造の教育力を配置するアレンジの教授学(Didaktik des Arrangements)という教授技術として読み開きうるとしたことを明らかにした。

これらを通して、イエナ・プランから描きうる公教育としての学校改革の展望を3つの視点から論じた。第一に授業・カリキュラムの視点から、教育学的事実から授業と学校を創っていく指導論をいかに構想できるか、という課題を提起した。第二に教育学研究の視点から、学校改革の基準が教育学に、それゆえに教育学的見地に求められなければならないということを指摘した。学校改革を現実化することができるかという問いは、それをいかに進めるかという実践的課題であるとともに、いかなる実践を「改革」として捉えようとするのかという教育学の学としてのあり方が問われているものとしても理解する必要がある。第三に教師教育の視点から、教師が自身の実践に対する教育的自由を獲得することに向けて、教育実践において自らの判断を可能とする教育観の形成に寄与しうる学術的な教師教育を学校改革の課題として提起した。

#### IV. 本研究の成果と課題（終章）

各章の検討を通して、本研究の目的に対する成果は以下の三点にまとめることができる。

第一に、イエナ・プランとは「自由で一般的な民衆学校」に向けた学校改革である。このことでペーターゼンは、経済・国家・教会といった教育に対する「外から」の影響要因による学校支配への抵抗を示している。それに対して学校が教育学に主導されることで「内から」改善されていく改革を求めた。この試みを、教育学を学問領域として自立させ、独自の見地と反省性をもって自律させることを企図した自律的教育科学の構想と結びつけることで、国家や宗教によるイデオロギー支配からのみでなく、他学問からも自由になる学校を構想した。あるべき学校像を教育学的事実研究による目の前の教育学的事実の分析と解釈から立ち上げようとしたことに学校改革としての要諦がある。

第二に、イエナ・プランとは学校を教育の視点から捉え直す学校改革である。それゆえ、「授業の方法論から授業の教育学へ」と表現されたように、知的陶冶のための教授の論としての教授学を人格形成のための指導の論としての教導学から捉え直すという理論的要求のもとで成立している学校改革である。授業指導論では、学校に教育学的状況を創出するという課題が、「授業の指導」と「授業における指導」という2つの指導によって達成される。このことはイエナ・プランが教授組織による間接的な指導のみでなく、それらが直接的な指導としての「授業における指導」とともに構想されることで成り立っていることを示している。それゆえ、学校改革としてのイエナ・プランの実践的課題は、教授組織の改革も教師の指導性として捉え、いかに構造の教育力を組織しうるのかということにある。

第三に、イエナ・プランとは内的学校改革であると同時に、それを超えて諸学校を改革していくことで学校制度の改革へと接続することを志向する「下から」の外的学校改革である。この試みは学校モデルとしての「イエナ・プラン」の提起とその教授組織の枠組み的受容によって現実化するものではない。ペーターゼンはこの試みの成否を教師の内的自由とそれによる創造的な力に委ねていた。それゆえにペーターゼンは学術的な教師教育による将来の教育実践の改善を媒介とすることに、「自由で一般的な民衆学校」を現実化する方途を見出していたのである。「イエナ・プラン」の精神がゲリッケのような教師の指導方針として昇華されることではじめて、学校改革としてのイエナ・プランは機能していた。

そのうえで、本研究の課題として次の二点を挙げる。第一に、ペーターゼンの自律的教育科学の構想を、大学の講座として学問的に成立・発展していくドイツ教育学史に位置づけることである。第二に、“Reformpädagogik”でもって理解されてきたシステム論に依拠した漸次的改革の改革図式を捉え直すことで、教育における「改革」の意味を問い直していく研究である。そのためには、改革教育学とはみなされてこなかった1933年以降の国家社会主義下での学校改革を政治的要請との関係から問うことが重要となると考える。この視点からの研究を通して、繰り返し論じられてきた「教育学は常に改革教育学である」という言明に対して、改革の動力となる基準がいかに設定されるかをイデオロギー批判的に問うていくことを今後の研究の課題としたい。

## V. 主要参考文献

### ■ 欧文文献

- Benner, D.(42001, 1973): *Hauptströmungen der Erziehungswissenschaft. Eine Systematik traditioneller und moderner Theorien.* Beltz, Weinheim.
- Benner, D., & Kemper, H.(1991): *Einführung zur Neuherausgabe des Kleinen Jena-Plan.* Beltz, Weinheim.
- Benner, D., & Kemper, H.(2003, 2001): *Theorie und Geschichte der Reformpädagogik. Teil1: Die pädagogische Bewegung von der Aufklärung bis zum Neuhumanismus.* Beltz, Weinheim und Basel.
- Bitterlich, J., & Bitterlich, B.(2018): Jenaplanpädagogik heute. In: Barz, H.(Hrsg.): *Handbuch Bildungsreform und Reformpädagogik.* Springer VS, Wiesbaden, S. 261-271.
- Both, K.(Autor), Seitz, O.(Hrsg.)(2015): *Jenaplan 21. Schulentwicklung als pädagogisch orientierte Konzeptentwicklung.* Schneider Verlag Hohengehren, Baltmannsweiler.
- Brügelmann, H.(2018): Unterrichts- und Schulentwicklung in Communities of Practice. In: Barz, H.(Hrsg.): *Handbuch Bildungsreform und Reformpädagogik.* Springer VS, Wiesbaden, S. 479-484.
- Coriand, R.(2009): Jena als Ort der Lehrerbildung. In: Koerrenz, R.(Hrsg.): *Laboratorium Bildungsreform. Jena als Zentrum pädagogischer Innovationen.* Wilhelm Fink, München, S. 99-109.
- Coriand, R.(2015): *Allgemeine Didaktik. Ein erziehungstheoretischer Umriss.* W. Kohlhammer, Stuttgart.
- Coriand, R., & Koerrenz, R.(2009): Jena als Ort der Allgemeinen Pädagogik. In: Koerrenz, R.(Hrsg.): *Laboratorium Bildungsreform. Jena als Zentrum pädagogischer Innovationen.* Wilhelm Fink, München, S. 63-82.
- Dietrich, T.(41986, 1952): *Die Pädagogik Peter Petersens. Der Jena-Plan: Modell einer humanen Schule.* Klinkhardt, Bad Heilbrunn.
- Draeger, H.(2018): Der niederländische Jenaplan. Richtungweisend für eine Erneuerung von Schule. In: Jacobs, T., & Herker, S.(Hrsg.): *Jenaplan-Pädagogik in Konzeption und Praxis. Perspektiven für eine modern Schule.* Schneider Verlag Hohengehren, Baltmannsweiler, S. 47-63.
- Fauser, P., John, J., & Stutz, R.(Hrsg.)(2012): *Peter Petersen und die Jenaplan-Pädagogik. Historische und aktuelle Perspektiven.* Franz Steiner, Stuttgart.
- Freyer, H.(1930): *Soziologie als Wirklichkeitswissenschaft.* B.G.Teubner Leipzig.
- Jacobs, T., & Herker, S.(Hrsg.)(2018): *Jenaplan-Pädagogik in Konzeption und Praxis. Perspektiven für eine modern Schule.* Schneider Verlag Hohengehren, Baltmannsweiler.
- Kaßner, P.(1989): Peter Petersen – die Negierung der Vernunft? In: *Die Deutsche Schule.* 81, S. 117-132.
- Keim, W.(1989): Peter Petersens Rolle im Nationalsozialismus und die bundesdeutsche Erziehungswissenschaft. Kritische Anmerkungen zu Peter Kaßners Beitrag in diesem

- Heft. In: *Die Deutsche Schule*. 81, S. 133-145.
- Klaßen, T.(1994): Die Jenaplan-Pädagogik im internationalen Feld. In: Röhrs, H., & Lenhart, V.(Hrsg.): *Die Reformpädagogik auf den Kontinenten. Ein Handbuch*. Peter Lang, Frankfurt, S. 281-296.
  - Kluge, B.(1992): *Peter Petersen. Lebenslauf und Lebensgeschichte. Auf dem Weg zu einer Biographie*. Agentur Dieck, Heinsberg.
  - Koerrenz, R.(2004): Peter Petersens Jena-Plan zwischen Regionalität und Internationalität. In: Coriand, R., & Koerrenz, R.(Hrsg.): *Salzmann, Stoy, Petersen und andere Reformen. Traditionen in der Thüringer Bildungslandschaft*. IKS, Jena, S. 79-90.
  - Koerrenz, R.(2009): Jena als Ort pädagogischer Innovationen. Eine Einleitung. In: Ders.(Hrsg.): *Laboratorium Bildungsreform. Jena als Zentrum pädagogischer Innovationen*. Wilhelm Fink, München, S. 7-13.
  - Koerrenz, R.(2012): *Schulmodell: Jena-Plan. Grundlagen eines reformpädagogischen Programms*. Ferdinand Schöningh, Paderborn.
  - Koerrenz, R.(2014): *Reformpädagogik. Eine Einführung*. Ferdinand Schöningh, Paderborn.
  - Koerrenz, R., & Lütgert, W.(Hrsg.)(2001): *Jena-Plan. Über die Schulpädagogik hinaus*. Beltz, Weinheim und Basel.
  - Kosse, W.(1963): Peter Petersen und sein Werk. In: *Pädagogische Rundschau*. 17(8), S. 697-704.
  - Link, J-W.(2017): Reformpädagogik und staatliche Schulreform. In: Ullrich, H., & Idel, T-S.(Hrsg.): *Handbuch Reformpädagogik*. Beltz, Weinheim und Basel, S. 89-104.
  - Luhmann, N., & Schorr, K. E.(1988): Strukturelle Bedingungen der Reformpädagogik. Soziologische Analysen zur Pädagogik der Moderne. In: *Zeitschrift für Pädagogik*. 34(4), S. 463-480.
  - Maschmann, I., & Oelkers, J.(Hrsg.)(1985): *Peter Petersen. Beiträge zur Schulpädagogik und Erziehungsphilosophie*. Agentur Dieck, Heinsberg.
  - Oelkers, J.(2005, 1989): *Reformpädagogik. Eine kritische Dogmengeschichte*. Juventa, Weinheim und München.
  - Oelkers, J.(2016): Braucht man zur Schulreform Reformpädagogik? In: Regenbrecht, A., & Pöppel, K. G.(Hrsg.): *Sicht-Weisen der Reformpädagogik*. Ergon, Würzburg, S. 151-163.
  - Ortmeyer, B.(2009): *Mythos und Pathos statt Logos und Ethos. Zu den Publikationen führender Erziehungswissenschaftler in der NS-Zeit: Eduard Spranger, Herman Nohl, Erich Weniger und Peter Petersen*. Beltz, Weinheim.
  - Petersen, E. -M.(1934): Führung im Rechenunterricht. In: Petersen, P.(Hrsg.): *Die Praxis der Schulen nach Jena-Plan*. Hermann Böhlau Nachfolger, Weimar, S. 41-66.
  - Petersen, E. -M.(1951): *Kleine Anleitung zur Pädagogischen Tatsachenforschung und ihrer Verwendung*. Simons, Marburg.

- Petersen, P.(1913): Schulreform. In: Ders.(1925): *Innere Schulreform und Neue Erziehung. Gesammelte Reden und Aufsätze*. Hermann Böhlaus Nachfolger, Weimar, S. 1-5.
- Petersen, P.(<sup>2</sup>1962, 1924): *Allgemeine Erziehungswissenschaft*. Walter de Gruyter, Berlin.
- Petersen, P.(1925a): *Innere Schulreform und Neue Erziehung. Gesammelte Reden und Aufsätze*. Hermann Böhlaus Nachfolger, Weimar.
- Petersen, P.(1926): Die akademische Lehrerbildung an der Universität Jena. In: *Schulreform*. 5, S. 51-58.
- Petersen, P.(1927a): Pestalozzis Menschenschule. die Forderung der Gegenwart. In : *Die Volksschule*. 23(6), S. 213-220.
- Petersen, P.(1927b): Pestalozzis Menschenschule. die Forderung der Gegenwart. In : *Die Volksschule*. 23(7), S. 255-266.
- Petersen, P.(1927c): Die Gegenwartsaufgabe der Volksschule und die neue Lehrerbildung. In : *Die Volksschule*. 22(21), S. 767-772.
- Petersen, P.(<sup>21/22</sup>1952, 1927): *Der Kleine Jena-Plan*. Westermann, Berlin.(= Petersen, P.(1927d): *Der Kleine Jena-Plan einer freien allgemeinen Volksschule*. Beltz, Langensalza)
- Petersen, P.(Hrsg.)(1930): *Schulleben und Unterricht einer freien allgemeinen Volksschule nach den Grundsätzen neuer Erziehung*. Hermann Böhlaus Nachfolger, Weimar.
- Petersen, P.(1931): *Der Ursprung der Pädagogik*. Walter de Gruyter, Berlin.
- Petersen, P.(1932): *Pädagogik*. E. S. Mittler, Berlin.
- Petersen, P.(Hrsg.)(1934): *Die Praxis der Schulen nach Jena-Plan*. Hermann Böhlaus Nachfolger, Weimar.
- Petersen, P.(1935a): Die erziehungswissenschaftlichen Grundlagen des Jena-Planes im Lichte des Nationalsozialismus. In: *Die Schule im nationalsozialistischen Staat ein Volk. Ein Reich. Eine Schule. Für Volksgemeinschaft u. Führertum*. 11(6), S. 1-5.
- Petersen, P.(1935b): Gruppenarbeit nach dem Jena-Plan. In: *Deutsche Schule*. 39, S. 393-403.
- Petersen, P.(1936): Die Lehrerbildung an der Universität Jena. Ein schulpolitischer Beitrag. In: *Deutsches Bildungswesen*. (1), S. 20-31.
- Petersen, P.(1937a): *Führungslehre des Unterrichts*. Beltz, Langensalza.
- Petersen, P.(1937b): *Pädagogik der Gegenwart. ein Handbuch der neuen Erziehungswissenschaft und Pädagogik*. E. S. Mittler, Berlin.(邦訳 : ペーター・ペーターゼン著、大日方勝訳(1943)『現代の教育学—新教育科学・教育学便覧—』刀江書院)
- Petersen, P.(1946): Wissenschaftliche pädagogik im dienste der demokratischen erziehung und akademischen lehrerbildung. In: *Pädagogik*. Jg. 1, H. 2, S. 65-72.
- Petersen, P.(1951): *Eigenständige(autonome) Erziehungswissenschaft und Jenaplan. Im Dienst der Pädagogischen Tatsachenforschung und der Lehrerbildung*. Kaiser,

München.

- Petersen, P.(1954): *Der Mensch in der Erziehungswirklichkeit. Der Mensch in der vieldeutigen Welt*. Westermann, Braunschweig.
- Petersen, P., & Förtsch, A.(Hrsg.)(1930): *Das gestaltende Schaffen im Schulversuche der Jenaer Universitätsschule 1925-1930*. Hermann Böhlaus Nachfolger, Weimar.
- Petersen, P., & Petersen, E. -M.(Autor), Rutt, T.(Hrsg.)(1965): *Peter und Else Petersen. Die Pädagogische Tatsachenforschung*. Ferdinand Schöningh, Paderborn.
- Petersen, P., & Wolff, H.(Hrsg.)(1925): *Eine Grundschule nach den Grundsätzen der Arbeits- und Lebensgemeinschaftsschulen*. Hermann Böhlaus Nachfolger, Weimar.
- Petersen, U. -K.(Hrsg.)(1991) : *Der Jena-Plan. Die integrative Schulwirklichkeit im Bilde von Briefen und Dokumenten aus dem Nachlaß Peter Petersens*. Peter Lang, Frankfurt/ M.
- Retter, H.(1995): Der Reformpädagoge Peter Petersen(1884-1952). Zur Durchsetzung seiner Schul- und Lehrerbildungskonzeption in den zwanziger und dreißiger Jahren. In: *Zeitschrift für Pädagogik*. 41(2), S. 205-223.
- Retter, H.(2007): *Reformpädagogik und Protestantismus im Übergang zur Demokratie. Studien zur Pädagogik Peter Petersens*. Peter Lang, Frankfurt/ M.
- Retter, H.(2010): *Die Universitätsschule Jena Zufluchtsort für bedrohte Kinder im Nationalsozialismus. Zugleich eine Kritik der Fragwürdigkeiten jüngster "Petersen-Forschung"*. Jena Stadtmuseum, Jena.
- Retter, H.(2018): Peter Petersens pädagogischer Reformimpuls. In: Barz, H.(Hrsg.): *Handbuch Bildungsreform und Reformpädagogik*. Springer VS, Wiesbaden, S. 191-202.
- Retter, H.(2020): The dispute over the reform pedagogue Peter Petersen(1884-1952) in Jena 2010. Review of a „total disaster“ after ten years. In: *International Dialogue on Education*. 7(1), pp. 54-90.
- Schraut, A.(2016): Zum Einstieg. Sichtweisen zur Verortung und zum ‚Begriffen‘ von Reformpädagogik. In: Regenbrecht, A., & Pöppel, K. G.(Hrsg.): *Sicht-Weisen der Reformpädagogik*. Ergon, Würzburg, S. 13-23.
- Schulze, T.(2011): Thesen zur deutschen Reformpädagogik. In: *Zeitschrift für Pädagogik*. 57(5), S. 760-779.
- Schwan, T.(2000): Die „Kernzeit“ der Petersen-Debatte in der bundesdeutschen Pädagogik 1989 bis 1992. Prolegomena zu einer historischen Verortung. In: *Pädagogische Rundschau*. 54(3), S. 285-303.
- Schwan, T.(2007): *Die Petersen-Rezeption in der Bundesrepublik Deutschland 1960 bis 1984. die Jenaplan-Pädagogik zwischen "defensiver Rezeption" und einsetzender "Petersen-Kritik"*. Peter Lang, Frankfurt/ M.
- Schwan, T.(2018): "Wir sind weit davon entfernt zu meinen, den Weg gefunden zu haben". Über innovative und stagnative Phasen der Jenaplan-Pädagogik. In: *Pädagogische Rundschau*. 72(4), S. 485-506.
- Slotta, G.(1962): *Die Pädagogische Tatsachenforschung Peter und Else Petersen*.

*Studien zur Stellung und Bedeutung der "empirischen" Forschung in der Erziehungswissenschaft.* Beltz, Weinheim.

- Ullrich, H., & Idel, T-S.(2017): Einleitung zu diesem Handbuch. In: Ders.(Hrsg.): *Handbuch Reformpädagogik.* Beltz, Weinheim Basel, S. 8-20.

## ■邦文文献

- 安彦忠彦(2019)『私教育再生—すべての大人にできること—』左右社。
- 石井英真編著(2021)『流行に躍る日本の教育』東洋館。
- 伊藤敏子(2009)「新教育運動とナチズムの関係をめぐる研究の展開—ドイツにおけるペーターゼンとイエナプランへのまなざし—」教育思想史学会編『近代教育フォーラム』18、285-288頁
- 伊藤敏子(2010)「ペーターゼン教育学における心身問題の射程—イエナ・プランにみる心と身体の接点から—」三重大学教育学部編『三重大学教育学部研究紀要 教育科学』61、167-179頁。
- 伊藤暢彦(1992)「イエナ・プランにおける教育学的リアリズム」京都大学教育学部編『京都大学教育学部紀要』38、324-334頁。
- 伊藤暢彦(1993a)「教育原理としてのゲマインシャフト」大谷大学哲学会編『哲学論集』40、58-75頁。
- 伊藤暢彦(1993b)「ゲマインシャフトに立脚した教育—Peter Petersen~Heinrich Döpp-Vorwaldの系譜において—」大谷学会編『大谷学報』73(1)、45-46頁。
- 小笠原道雄編著(1984)『ドイツにおける教育学の発展』学文社。
- 奥村好美(2016)『〈教育の自由〉と学校評価—現代オランダの模索—』京都大学学術出版会。
- 奥村好美(2022)「個別化・個性化教育の動向と教師の自律性—オランダのイエナプラン教育を手がかりとして—」日本教育方法学会編『教育方法 51 教師の自律性と教育方法—教育のデジタル化・協働的な学び・個別最適な学びを解剖する—』図書文化、38-51頁。
- 熊井将太(2015)「異年齢学級教育の可能性と課題—イエナ・プランを中心に—」山口大学教育学部編『山口大学教育学部研究論研究論叢第3部 芸術・体育・教育・心理』65、53-66頁。
- 熊井将太(2017)『学級の教授学説史—近代における学級教授の成立と展開—』溪水社。
- 熊井将太(2021)「個別化・個性化された学び—「未来の学校」への道筋になりうるか—」石井英真編『流行に躍る日本の教育』東洋館出版、45-70頁。
- W. クラフキー著、小笠原道雄監訳(1984)『批判的・構成的教育科学 理論・実践・討論のための論文集』黎明書房。
- 小林万里子(2006)「ハンブルク学校改革運動における学校共同体の様相—ペーターゼン校長時代のリヒトヴァルク校を中心に—」福岡教育大学編『福岡教育大学紀要』55(4)、41-50頁。
- 三枝孝弘(1957)「教育計画の根底にある人間観の問題—イエナ・プランを支えているもの—」安藤堯雄他編『教育方法学—その人間観的基礎—』明治図書、442-458頁。
- 三枝孝弘(1958)「ペーターゼン教育科学における〈信仰〉の位置について—イエナ・プランの基礎研究—」東京教育大学教育学部編『東京教育大学教育学部紀要』4、101-111頁。

- 三枝孝弘(1964)「イエナ・プランの研究—ドイツにおける学校の協同体的自主管理にかんする思想および運動の序論的考察—」岡山大学大学院教育学研究科編『岡山大学教育学部研究集録』(18)、1-14頁。
- 三枝孝弘(1982)「P・ペーターゼン—イエナ・プランの創始者—」天野正治編『現代に生きる教育思想5 ドイツ(Ⅱ)』ぎょうせい、199-232頁。
- 境沢和夫(1996)「イエナ・プラン」海後勝雄編著『教育科学入門叢書(8) 教育課程論』誠文堂、114-127頁。
- 佐久間裕之(2010a)「ペーターゼンとイエナ・プラン—ドイツにおける長期研修の報告—」世界新教育学会編『教育新世界』58、45-48頁。
- 佐久間裕之(2010b)「ペーターゼンにおける *Mischung* の教育的意義」『日本ペスタロッチー・フレーベル学会第3回課題研究』1-6頁。
- 佐久間裕之(2013)「ナチス政権下のペーターゼンとイエナ大学附属学校—ペーターゼン教育思想とナチズムの関係性をめぐる最近の研究動向—」世界新教育学会編『教育新世界』61、67-69頁。
- 佐久間裕之(2014)「イエナ・プランにおける異年齢集団と教師の力量形成—ドイツ・ローゼンマール校を事例として—」玉川大学編『教師教育リサーチ年報』(4)、57-66頁。
- 佐久間裕之(2015a)「イエナ・プランにおける異年齢集団と教員研修—GJP の「ディプロムコース」を事例として—」玉川大学編『教師教育リサーチ年報』(5)、19-29頁。
- 佐久間裕之(2015b)「ペーターゼンのペスタロッチー理解—「人間学校」(*Menschenschule*)の理念を軸に—」日本ペスタロッチー・フレーベル学会編『人間教育の探究』27、27-52頁。
- 佐久間裕之(2016)「ペーターゼンにおける「教育共同体」思想の特質—『自由で一般的な国民学校のイエナ・プラン』に着目して—」玉川大学教育学部編『論叢』49-67頁。
- 鹽見シモ(1933)「イエナ・プラン」日本教育学会編『教育学研究』1(12)、109-120頁。
- 助川晃洋(2008)「ペーターゼンの『小イエナ・プラン』における「教育的状況」の概念」宮崎大学教育文化学部編『宮崎大学教育文化学部紀要教育科学』(19)、13-22頁。
- 田中怜(2019)「改革教育学の批判的継承としての学校実験「イエナ・プラン・ヴァイマール」(*Schulversuch „Jena-Plan Weimar“*)—生活との差異に基づく授業の構想とその実践—」日本教育方法学会編『教育方法学研究』44、61-72頁。
- 田中怜(2022)『学校と生活を接続する—ドイツの改革教育的な授業の理論と実践—』春風社。
- 対馬達雄(1987)「ペーターゼンにおけるゲマインシャフトの理念と学校共同体の形成」日本教育学会編『教育学研究』54(2)、145—155頁。
- 手取義宏(1991)「ペーターゼンの授業の指導論に関する一考察」大阪市立大学教育学教室編『教育学論集』17、57-66頁。
- 中川綾(2019)『あたらしいしょうがっこうのつくりかた』ナガオ考務店。
- 南部広孝編著、京都大学大学院教育学研究科教育実践コラボレーション・センター監修(2021)『検証 日本の教育改革—激動の2010年代を振り返る—』学事出版。
- H.-E.テノルト著、小笠原道雄・坂越正樹監訳(1998)『教育学における「近代」問題』玉川大学出版部。

- 深沢広明(1979)「イエナ・プランの教授学的検討—学校教授組織の史的展開—」中四国教育学会編『教育学研究紀要』25、79-80頁。
- 深沢広明(1982a)「イエナ・プランの教授学的検討(Ⅱ)—指導(Führung)観を中心に—」中四国教育学会編『教育学研究紀要』28、112-115頁。
- 深沢広明(1982b)「改革教育学の教授学的検討(Ⅱ)—教師の指導性の問題を中心として—」広島大学大学院教育学研究科『広島大学大学院教育学研究科博士課程論文集』8、46-52頁。
- フレーク・フェルトハウズ/ ヒューバート・ウィンターズ著、リヒテルズ直子訳(2020)『イエナプラン共に生きることを学ぶ学校』ほんの木。
- W. ブレツィンカ著、小笠原道雄監訳(1990)『教育学から教育科学へ』玉川大学出版部。
- ペーターゼン著、三枝孝弘・山崎準二訳著(1984)『学校と授業の変革—小イエナ・プラン—』明治図書。
- 本田由紀(2020)『教育は何を評価してきたのか』岩波書店。
- 松尾日出志(1995)「パウル・エストライヒのペーター・ペーターゼン教授への書簡—改革教育学運動における政治的教育者としてのエストライヒ—」愛知教育大学教科教育センター編『愛知教育大学教科教育センター研究報告』19、41-50頁。
- 松尾日出志(2016)「イエナのイエナプラン学校のコンセプトと実践」愛知教育大学編『愛知教育大学教職キャリアセンター紀要』1、88-92頁。
- 宮田丈夫(1995)「ペーターゼン『イエナ・プラン』」細谷俊夫編著『教育科学入門叢書(7)教育方法論』誠文堂、175-188頁。
- 屋名池歩美(2002)「昭和初期におけるペーターゼンのイエナ・プランの受容—守山喜一と山極眞衛に注目して—」上智大学教育学研究会編『上智教育学研究』(35)、47-67頁。
- 山極眞衛(1932)「ペテルゼンに於ける教育の本質と教育者の根本的態度」日本教育学会編『教育学研究』1(7)、985-1006頁。
- リヒテルズ直子(2006)『オランダの個別教育はなぜ成功したのか—イエナプラン教育に学ぶ—』平凡社。
- リヒテルズ直子(2019)『今こそ日本の学校に！イエナプラン実践ガイドブック』教育開発研究所。
- リヒテルズ直子・苫野一徳(2016)『公教育をイチから考えよう』日本評論社。

## ■史資料

- IX . Pädagogische Woche der Erziehungswissenschaftlichen Anstalt der Thür. Landesuniversität Jena in Finsterwalde / N.L. vom 17-21. Mai 1932.
  - XII . Pädagogische Woche. Der Erziehungswissenschaftlichen Anstalt der Thür. Landesuniversität Jena.
  - 16. Pädagogische Woche der “Erziehungswissenschaftlichen Universitätsanstalt” Jena in Rahden(Kreis Lübbecke, Westfalen) vom 22.-26. Mai 1934.
  - Vierte Pädagogische Woche der Erziehungswissenschaftlichen Anstalt der Universität Jena(Prof. P. Petersen) in Bremen vom 3.-6. Okt. 1927.
- ※上記史資料は、ペーター・ペーターゼン・アーカイブ・フェヒタ(Peter Petersen Archiv Vechta)で収集したものである。